

第112回宇宙政策委員会 議事録

1. 日時：令和6年4月25日（木） 14：00－15：30

2. 場所：中央合同庁舎4号館共用第3特別会議室

3. 出席者

(1) 委員

後藤委員長、常田委員長代理、遠藤委員、片岡委員、白坂委員、
鈴木委員

(2) 事務局

内閣府宇宙開発戦略推進事務局
風木事務局長、渡邊審議官、猪俣参事官

(3) オブザーバー

森昌文内閣総理大臣補佐官
宇宙航空研究開発機構（JAXA）：山川理事長

(4) 関係省庁

総務省大臣官房：豊嶋審議官
総務省国際戦略局宇宙通信政策課：扇課長
文部科学省研究開発局：千原局長
文部科学省研究開発局宇宙開発利用課：嶋崎課長
経済産業省大臣官房：浦田審議官

(5) プレゼンター

宇宙航空研究開発機構（JAXA）：佐藤理事、佐々木部長

4. 議事（○：意見等）

(1) 宇宙戦略基金の基本方針案・実施方針案について

<宇宙事務局、総務省、文部科学省、経済産業省より説明>

○遠藤委員 デュアルユースをしっかりとやるということで始まった基金ですが、大学に委託する場合とか、デュアルに対する理解は得られているという理解でよろしいのか、文部科学省に伺いたいと思います。デュアルで進めていただきたいという思いからこのお話ししております。

もう一つ、研究の期間が7年ぐらいで終わるのですが、基金は10年間となっている。なぜ研究は7年ぐらいが最長になっているのかということをお話して

ただけませんか。

更に、基本方針の文章の中には書かれてあるのですが、これから基金に対する非常に厳しい目が財政当局を初めとして向けられているので、EBPM (Evidence-based Policy Making) をしっかりやっていただきたいと思うのですが、その主体は一体どこになるのか、そのマネジメントはどこですか。例えば経産省の中には、RIETI (独立行政法人経済産業研究所) の中にEBPMセンターなどがありますけれども、それぞれがやるのか、それとも一括でやるのか、その辺りを教えてください。

あとは、資金の支援の仕方が委託と補助ということになっているのですが、例えば、リスクは非常に高いのだけれども、成功すればリターンが大きいような種類は、ある種、そのエクイティに近いような出資みたいな形の検討、例えばメザニンファイナンスでも良いのですが、そういったところの検討というのは必要ではないかと思うのですが、委託を現物出資に将来的に変えるとか、そういった可能性があるのかということもお伺いさせていただければと思います。

○文部科学省 大学の研究に関する件をお答えさせていただきます。

正直な所、大学でまちまちというのが答えでございます。御案内のとおり、日本学術会議の軍事研究反対の声明とかがあって、それを受けて、本学はそういったことをしないという声明を出されている大学とか、一方で、元々防衛省さんの安全保障推進制度、基金を毎年やっていらっしゃるんですが、それに対してしっかり応募をされている大学もいらっしゃるということなので、大学によってその対応が結構分かれていると承知しています。

今回、こちらは、実施方針あるいは基本方針に、内閣府を中心に作っていたところに、デュアルユース、マルチユースということを書いた上で公募しますので、そういったことをちゃんと踏まえた上でこのテーマに応募してきていただける。そういうことを学内でしっかり通していただく必要があるのかなと思います。また、民間企業とかと組むときには、その中で関係者がちゃんと共通理解を得てそういうことにも使っていけるような技術の開発だと思っていますので、ちゃんと答えられていなくて恐縮なのですが、そこは大学によって温度差があるのだろうと思っています。

○遠藤委員 防衛省の基金は取らない大学が多く、また、非常に大どころの大学はなかなか手を出しにくいところがあったので、この基金についてはそれを超えて積極的に議論していただけるようにぜひ進めていただけたらと思います。

○文部科学省 しっかり対応したいと思っています。

○風木局長 基金が7年最長かとのご指摘がありましたけれども、SX拠点、大学との連携関係が8年程度となっております。全体として10年の仕組みである

ので、その中で、今回いただいた3000億円の執行の中では、精査したところ、7年、6年、5年、テーマにより様々でございますが、現時点で最大8年があります。これは、今後ステージゲートを置いていきますので、今やっているプロジェクト自身が、今後延びていくものもあれば短縮するものもあるということなので、まさに10年というマndateをいただいていますので、その中でしっかりやります。

それから、これは速やかに追加するような、造成するという仕組みになっていますので、今後また財政のほうで確保できれば、新しいプロジェクトはまた延びていくような形になりますので、全体としては、今回精査してこういう形で整理したということです。ですから、将来的にはもちろん長いものも出てくる可能性がありますので、その仕組みの中でしっかり対応できるのが1点目です。

2点目は、EBPM。基本方針3ページの一歩下に注8とありまして、EBPMを実施する観点から、国際競争力、社会実装の状況、その他、各府省がそれぞれの実施テーマについてJAXAと協議して定める指標についてもモニタリングすることとしており、基本的に各府省とJAXAが共同してEBPMをやります。同時に、宇宙政策委員会に報告がありますので、我々内閣府としても当然関与していくということで、これはしっかりチェックさせていただく形になります。各省庁やJAXAの中で、先ほどRIETIなども出ましたし、そういう形で関わっていただくことも、当然、可能性としては排除していませんので、これをしっかりやるということが政府として示しております。

基金の一般論について、昨今の様々な議論についても我々は十分アドレスしていきまして、私どもはそれに全部答えられるような形で、透明性、審査の公正性、その他含めて対応していると考えております。

それから、出資の話が出ました。今回、委託・補助をきめ細かくやっていきまして、今回、出資の仕組みは法令上設けていませんので、そこについては今回の基金はまさに3000億円のJAXA法を改正した結果としての活用となります。出資ということについては、リスクマネーをどのような形でスタートアップに供給していくかという幅広い観点から、当然、別途議論する必要もあると思いますが、今回は、法令上の基金をしっかり活用していくということで、基本的には、委託や補助で対応するという整理になっております。

○常田委員長代理 総額が非常に大きいので、研究マネジメントも非常に大事だと思っておりますが、PD（プログラムディレクター）・P0（プログラムオフィサー）が要のポストとしてあります。例えば文科省はWPI（世界トップレベル研究拠点プログラム）等が非常に成功しているプログラムですけれども、そこでは専任のPD、各個別事業にそれぞれ独立のP0がいて献身的にやっている姿を見

ています。また、JST（国立研究開発法人科学技術振興機構）にもPD・POというのがあると思います。ここの内閣府の資料を見ますと、PDは外部有識者で専任でないし、この巨大な各種多様なプロジェクトを1人で見るようなイメージになっている。WPIと比べると、マネジメント体制の粒度が非常に粗くて、見切れるのかというのがあります。POも3分野に1人ずつぐらいで、それぞれ3分野の中でも性質の違うものがありまして、今までの感覚だと、ここに説明したプログラムの一つ一つにPOがいないとやっていけないぐらいの額と内容があるのではないかという心配です。例えば具体的には、文科省のWPIでPD・POというのがあって、その役割が定義されていて、JSTにもいろいろなPD・POがあるのですけれども、これらの機関のPD等の役割等を表に全部書いてみて、PD・POの役割とやることの内容と、その粒度がどう違うのか、ちょっと比べてみたいと思います。3000億でこれだけ多様なものがあるって、1人のPD、3人のPOであれと同じことがやれるとはとても見えないのです。

○風木局長 まず、POも1人ではなくて5～8人ぐらいを想定していますし、PDももちろん専任かどうかというのはありますけれども、当然このマニフェストの中で集中してやってもらいます。それから、これはやはり審査会なので、外部でしっかり公正にやるということが第一の目標になっています。そういう意味では、このJAXAのほうにゼネラルプロデューサーの方がおられて、当然、POと連携して整理や準備等を含めて、事務局のほうは今40人体制ですけれども、必要に応じて充実させていくことになりますので、より審査に集中していただく。

ただ、御指摘のようなJSTやその他の事例なども、我々も横で見ても、今回こういう形にしたわけですがけれども、今後、不断の検証はしていきたいと思えます。

○常田委員長代理 物事が上手くいっているといいのですが、例えば、なかなか伸び悩んでいるプロジェクトがあると非常に大変なわけです。1つのプロジェクトであっても止めるか止めないか、どう接したらいいかというところで、非常に時間をかけてやらなければいけない場合があります。今のお話だけで、これだけのリソースで全部がやりきれるかというのは私としては得心がなかなかあったというのがあります。

それから、JAXAがいろいろな機能を果たすと書いてあるのですが、文科省のプログラムを見ると、100億規模で10人とかの事務の人がいるぐらいで、今、JAXAが3000億を何人でやろうとしているのか。お金が増えれば、それに比して人数が増えるわけでもないかもしれないけれども、その比例配分でいくと物すごく人数が要るのですね。だから、どういう考え方で人数あるいは組織体制を整えるかというところも気になるのですけれども、JAXAの体制は今どうな

っているのですか。

○風木局長 現時点ではまだ40人ですが、これは今後拡大していくと聞いていますので、この進捗において、実際に公募がかかっていくのは7月以降になりますので、これから準備体制を整えようと。

○文部科学省 追加は余りなくて、まさに今、40人体制です。もともと3000億のときに50人ぐらいかなというのは、他のプロジェクトを見て検討した結果今想定はしております。もちろん、JAXAにはゼネラルプロデューサーがついてそれぞれのテーマをきめ細やかに見てまいります、今回はファンディングになりますので、実際に研究開発、技術開発は委託なり補助が出た先がやるということになります。したがって、GPなりPD・POの方々がやられるのは、どちらかというところ全体を見ながらマネジメントというか、そちらのほうの役割が大きいかなというところはちょっと違うかもしれません。

○常田委員長代理 何もかも既存のほうに合わせるということではなくて、今回のJAXA基金の性質を見た適正なマネジメント規模はどこかというのが、今までの文科省の実績でこれで妥当なのかどうか、分からなかったということで、そこはやはり宇宙開発委員会としても支えるマネジメント体制の規模についてももう少し議論しておく必要があると思います。

もう一つ、それぞれ割と目的がはっきりしているものですが、文科省のSXだけは異なっていて少し一般的なものになっていまして、WPIとは違うけれども、その小型版みたいにも見えないこともない。ふわっとしているだけに、マネジメント体制がSXに対しては重要かと思うのですが、ステージゲートが5年目に1個あるだけで、これがWPIでしたら、毎年サイトビジットがあり、国際委員を含む委員会でよく見てアドバイスするやり方を取っています。それから、5年目に中間評価をやって、報告書は、厳しかろうが全て公開ということをやっています。このSXのところのマネジメント体制がまだよくリファインされていないような印象を受けるのですけれども、その辺、文科省、どうですか。

○文部科学省 そのところは、確かに、他のテーマと比べてむしろ拠点を作る、そこでいろいろな研究開発をしながら、人材育成とか、そういった卓越した技術の推進体制を作っていくたいということなので、他のテーマにみたいに明確なテーマ設定とはちょっと異なる、正直そう思っています。ですので、今、御指摘のところ、ステージゲートも5年目に1回ということを考えていますが、そこら辺のやり方は、走りながら、いただいた貴重なお金を生かせるように、そのところは御指摘も踏まえてしっかり対応していきたいと思います。

○鈴木委員 私の方からは資料1-1-1に関連して。私、これは大変よくできたプランニングだと思っていまして、特に13ページにありますテーマの全体

像です。これは、矢印がいろいろなところに向いているのですけれども、1つは、宇宙輸送というところに向かって、宇宙に行く、ロケットが何といても宇宙開発の軸にあるということが示されているのですが、それ以上に、最終的な矢印が全部地球に下りてきているのですね。これが重要な矢印の向き方というか考え方だと考えております。

先ほど来、PDをどういう形で運営していくのかということで、プログラムのガバナンスの問題が議論されているかと思うのですけれども、その際も、全体像は、地球に向かって矢印が下りてくる、要するに宇宙ソリューション産業ですとか社会課題の解決ですとか、こういったところに最終目標があるのだということを常に意識していただきたいなと思っています。

また、14ページの支援額を踏まえたマッピングですけれども、これも非常に良いと思っています。それぞれの省庁ごとにどういう役割というか、どのぐらいの規模で何をやるかということがはっきりこれで分かるのと、もう一つは、支援額の楕円がきちんと描かれていることで、この規模の事業をやっていく、言い方を換えれば、この事業がどのぐらいの社会的インパクトを期待されているのかということを示しているものだと思いますので、こういった図示化された、見える化したやり方というのはとても良いだろうと思っています。

それは同様に15ページのところでも言えるのですけれども、TRLの設定で、TRLでA、B、C、Dと分けていたときに、場合によってはDとかCがすごく増えるのではないかと考えていたところ、そんなことはなく、Aの補助、Bの補助を含めて、産業化を進めていくための高い技術成熟度のものもかなり多く取り込む、そういうプロジェクトになっていて、これはまさに13ページに書かれていた最終的な出口としての宇宙ソリューション、社会課題解決、新しいビジネスの創造というところにつながっている。そういう配置になっているのではないかと考えています。もちろん、月面のプロジェクトとか、いろいろなチャレンジングなことがあって、これらはプログラムとして運営がなかなか難しいものもあるかと思いますが、こうしたプログラムが最終的な矢印として地球に向いているというところを忘れることなく、月面の探査開発等も含めて頑張っていたきたいと思っています。

○白坂委員 本当に正念場といたしますか、世界が変わっていく中で、ここで我々日本がそこに伍していけるかどうかの分かれ目で、重要なターニングだと思っています。その中でこの基金が用意され、それをうまく実行していくための検討がどんどん進んでいることに感謝を示したいと思います。私からはコメントが1つと質問が2つあります。

コメントの1つは、鈴木先生と同様ですが、全体の位置付けがすごく重要だなと思っています。個々だけでみていると分からないことをどうやってちゃん

と把握しておくかという意味では、13ページの全体像もそうですし、14、15ページも、全体がどういうマッピングになっているかという全体像を表している図であるのですが、それぞれ位置づけが違うものが1つのプログラムの下に動きますので、こういった形で全体がどうなっているのかを常に把握しながら、なおかつこれは変わっていくものだと思っていますので、これをちゃんとメンテナンスしながら使っていくというのはすごく重要なことだと思っています。この資料はすごくよくできているなと感心して見させていただきました。

質問が2点あるのですが、1つは、ベンチマークについてです。最長8年ぐらいあるので、やはり長い。私も別の所でやっている10年の基金のちょうど2年目で、モニタリングを毎年やっているのですが、世の中の状況の変化が余りにも速くて、当初の計画どおりだと、もう辞めるという決断をしたものもあります。逆に、加速しないと全く役に立たないというものがあるわけです。その中で、変えていくということはもちろん考慮済みだと思うのですが、ベンチマーキングを誰がやるのだろうと実はちょっと気にしています。これだけのプロジェクトがあると、プロジェクトごと一つ一つにベンチマークが必要になっていくので、かなりの規模感になってくると思ったときに、さすがにJAXAが全部やることは出来ない。それは外注してももちろん構わないのですが、そういったことを予算なりにちゃんと想定しておかないと、状況がかなり変わる。先端だからこそ速い分野であると感じていまして、このベンチマーキングはどのように考えていますかというのが1点目にはなります。

2点目は、まさに内閣府の資料15ページ目を見せていただいたからこそ思っているのですが、TRLの高いものももちろん今回あるのですが、ある程度低いものも含まれています。これは元々の想定どおりだと思っています。TRLが低いところも、かなりの規模感が大きいものに対して、外部の大学だとか国研が主となる想定と書かれています。一方で、この規模感になると、JAXAの支援なしで宇宙会議の技術開発が本当にできるのだろうかということも思っています。そういった意味では、今回、特に文科省はどうしても多くなると思うのですね。経産省は出口の近くなので、事業者にかなり任せられるのに対して、これまでも本当に技術開発を支えてきたのはJAXAで、では、JAXAはTRLが低いものに対してどういうふうな関与までが可能なのか。今回の基金の枠組みの中で、もちろん自分達だけというのはないと思うのですが、どんな関与、支援の仕方が可能なのだろうか。ここがまだ個人としてよく理解できていないので、この辺り、今のお考えがあったら教えていただきたい。

○風木局長 まず、ベンチマーキングについてです。これは、先ほど遠藤委員からお話のあったEBPMもあれば、一例を挙げると、本文の13ページに「JAXAは」とありまして、技術開発マネジメントにおいて必要となる国内外の技術動向調

査をやっていくことがマンドートになっています。予算をどう配分するかというのはもちろんありますけれども、やることが決まっていますので、JAXAはこれまでの知見を生かして調べてベンチマーキングに貢献すると理解をしております。

それから、元々は宇宙技術戦略もございまして、そこにベースになるベンチマークが置いてあります。ただ、これは毎年毎年どこまでローリングできるかという論点もありますので、一義的にはJAXAの対応がまず来ます。

2つ目は、TRLが低い所は今回比較的この表の通りでありまして、これはまさに技術戦略をやったときに議論がありましたけれども、技術全体をカバーしている中で今回これらが候補だということなので、これまで制度全体で取り組んでいますSBIRもありますし、Kプロもありますし、科研費もある、あるいはJAXAの交付金もあるわけです。そういう中で、JAXAがどういう形で貢献していくかというのはあるかなと考えていますが、もし文科省のほうから補足があればお願いします。

○文部科学省 JAXAの関与ですけれども、当然、ファンディングエージェンシーになるので、自分で応募したりとか、そういうのはできません。ただ、一方で、元々この宇宙戦略基金ができた時の経緯として、産学官の結節点にJAXAはなるのだという観点。これは、当然、ファンディングをしながらも、一方で、技術的な助言とか、そういった機能というのはJAXAにもともとございまして、当然、こういう公募をやるときにアドバイスとかをさせていただくとか、持っている経験・知見を提供するとか、そういったことが想定をされています。

その上で、お手元の資料1-3-2が実施方針案の本文でございましてけれども、例えば「宇宙輸送機の革新的な軽量・高性能化及びコスト低減技術」の7ページの「7. 技術開発マネジメント」というところです。「基本方針で定められている技術開発マネジメントに加えて、（中略）それぞれのテーマにおいて、ロケットの機体、エンジン・タンク等に関する基本的な情報（サイズ等）を示すとともに、支援開始後も、事業者の求めに応じて、より詳細な情報を提供することとする」とか、そのような形で各テーマに技術開発マネジメントでJAXAの関与が書いてありまして、そういったところが現時点では想定されているということでございます。当然、それぞれが委託あるいは補助を受けて、何か困ったときといったタイミングにおいても、JAXAが持っている知見・経験といったことよっての問題の解決とかにお世話をさせていただければと思いますし、逆に、そういったことをすることによってJAXAにもまた知見が集まるというウィンウィンの体制も整えられるのかなとは今思っております。

○白坂委員 理解できました。開発がちゃんとできて、その先に進んでいって、その先は事業者が受け取って事業化していくみたいな形にももちろんなっていく

と思うのですが、それがちゃんと進むことがやはり重要なので、許される範囲でうまく対応してもらえばと感じております。

○片岡委員 支援規模別のマッピングと技術成熟度のマッピング、こういうのが出来て非常に分かりやすいと思うのですが、これからJAXAさんが具体的なプログラムの選定をされるということになると思うのです。先ほども御説明の中であったのですけれども、SBIRのフェイズ3で既にいろいろな事業が流れていますね。さらにKプロでも流れているということで、防衛省の中でも中期計画の中でいろいろプログラムが見え隠れしてきているものがある。どうやってその選定をしていくかといったところですね。それと、支援規模マッピングや、各具体的な事業の時間軸マッピングのような、全体として我が国の宇宙産業基盤、商業化に向けての新たなビジネスの創成とか、口で言うのは簡単ですが、効率的に相関が取れているかというのを一回チェックしておく必要がある。技術成熟度の時に、SBIRのいろいろな事業、どんな状況なのかといったところをサーチして選定を進めていく必要があると思います。これは、時間的にはいつ頃までに選定をされるのですか。

○風木局長 今回、この基本方針を定めまして、実施方針を定めて、これで額が決まり選定の内容が決まります。その後JAXAで公募要領ということになって、今は7月以降を想定しています。今御指摘のKプロ、SBIR、その他のプロジェクトは、今回、予算を確保する上で、当然、全て前提になって、重ならないような形になっております。したがって、これは新規分野ということになります。ただ、片岡委員がおっしゃるのは、それを踏まえつつも、全体として基盤強化になっているような仕組みにしないといけないということと理解しております。

○片岡委員 色々物にするためには連携していきますよね。その時間がずれていると、やってもなかなかスムーズな連携が図れないということがあるので、ぜひ選定のところは、ステージゲートの前に訪れる最初のあれだと思しますので、相当慎重にやっていただく必要があるのかなと。

それから、SXの開発拠点ですけれども、今、スタートアップとか、色々な所と話をすると、AIの技術者が本当に取られてしまうということです。宇宙でも結構困ったらしいのですけれども、どんどん外に取られてしまっているという状況があって、AIの人材が不足しているということがある。この拠点でAI関連のものもやるのでしょうか。

○文部科学省 今、こういうテーマで公募をするので、実際にどういう形で応募が来るか、それで審査をしていくので、どうなるかは何とも予断を持って申し上げられません。ただ、SXは、もちろん仰る通りで、いわゆるデジタルトランスフォーメーションの宇宙版ということでございますので、この時代、AIというのは普通入っているという認識です。

○片岡委員 ぜひ公募のときもその辺の観点をひとつよろしくお願ひしたいと思ひます。○後藤委員長 私の方からも2点コメントを申し上げると、まず第1点は、補助金ないし委託ということで、中小企業、スタートアップなのです。これは、ややもすると、いわゆる運転資金等に流用される懸念があるのではないか。特に中小企業、零細企業、スタートアップは、多分、資金繰りがそんなに潤沢ではないだろうから。ですから、こういった管理をしっかりとやるためにも、例えば金融庁とか銀行協会にこの基金の趣旨を理解してもらって、金融機関に対して、一言で言えば返済に回すとか、そういうようなことがないように、それはやはりしっかりとやるべきだろうと思ひます。

その観点からいうと、補助金も良いのだけれども、例えば中小、スタートアップはむしろ委託のほうがそういった資金の流用リスクは相対的に少ないのかなという気もします。これは、よくよくしっかりとチェックしていただきたいと思ひます。

2点目は、もう皆さん仰っている基金の運営体制、マネジメントであります。今日、ちょうど日経新聞に、国の基金は不断の見直しで無駄をなくせという社説が出てきているわけです。今日は私、コピーしてきました。それで、基金に対してはチェックの甘さが指摘されてきて、これに対して国としてもしっかりとチェックしていく。

ただ、そのところで、宇宙や半導体などの産業を育てたりといった中長期の視点が必要な政策を進めやすくなる、それを生かす前提となるのは客観的な成果の検証である、各省庁に任せてはお手盛りになりかねない、外部の有識者、第三者を交え、厳しく評価する仕組みづくりを急ぐべきだと、今日まさに社説に載っているところでありまして、この宇宙政策委員会で皆さんがそういう問題意識を持って議論、発言していただいたら大変結構なことだと思ひます。

(2) 宇宙分野の成果発信について

<宇宙事務局、JAXAより説明>

○常田委員長代理 内之浦の展示館は昭和の雰囲気は漂っていて、全く投資されていないということで、種子島の展示館も、内之浦の展示館も見ましたが、余りの落差で地元の人が大変がっかりしているということなので、ぜひ善処をお願ひしたいということがあります。

それから、この前、鹿屋市の経済団体に呼ばれて講演してきたのですが、射場があることが地元にとってメリットになっていないと。博物館はその一つの例で、地元軽視といひますか、そういうふうにつえられているのではな

いかという心配があります。肝付町、鹿屋市の期待が大きいだけに、ここに書かれていることとちょっと乖離があるように感じますので、よろしく願いしたいと思います。

○JAXA 肝付町とJAXAの方での対話というのはより続けていこうということで、今おっしゃったような問題についても議論はしていきたいと思います。展示館の問題は、やはり資金が伴うこともありまして、筑波のほうもこれから施設の老朽化の更新がやっとならざるという状態にありまして、前者の資金もいろいろ考慮しながら、内之浦もしっかり取り組んでいきたいと思っております。この辺の対話を続けながらやっていきたいと思っております。

○白坂委員 今回、特に基金が来る前から急速に予算が増え、さらに今回、10年で1兆円というのは、世の中にすごく報道されていますし、国民の理解をちゃんとしていただけないと、我々はそれを裏切るわけにはいかないという状態に今なっているかと思っています。そういった意味では、これまでと同じスタンスの広報では全く話にならないのではないかと私は個人的に思っておりまして、もっとちゃんと伝えなければいけない。宇宙は、打上げとか宇宙飛行士とか、注目していただけるものを持っているので、そのポイントは皆さんに知っていただけるのですけれども、では、基金の1兆円との関係性を聞かれても、そこは答えられないと思うのですね。

先ほど佐藤理事も、定常の活動をちゃんとしていただくことが必要とおっしゃっていましたが、まさにその通りだと思っております。もうJAXAの知名度の話ではない、そのレベルではなくなったというのが私のイメージです。ですので、ここで研究開発もギアを入れ替えるのですが、広報もちょっとギアを入れ替えていただいて、何を目指していくべきなのか。そこがちゃんとできているのか。

先ほどまさに遠藤委員からEBPMという御指摘がありました。広報も、何をやって何をやっているのかというフィードバックがかけられていて、一朝一夕ですぐにはいかないと思っておりますけれども、これは改善をしていく中できちんと理解していただき、国民の方がこのお金を出したことに對してきちんと納得していただける。その先に、もっと出していただくというのももちろんついてくるので、国民がちゃんと理解して、お金を使ってもらってよかった、あるいはもっと出さなければいけないのではないかとこのところまで行くことを考えると、JAXAだけではないのですけれども、政府全体として、我々もそうなのですが、関係者は考えを入れ替えて、これまで以上にきちんと広報していくことが重要かなと思っております。

ですので、JAXAも、今日はどちらかというところ、これまでの説明だったかなと思うのですが、これからはもう一つステップアップしていただいて、広報戦略

もこの計画も、どうやってフィードバックをかけながらより良くしていくかというところにまで一歩進んでもらえるようになっていただけるといいかなと思いました。

○JAXA 貴重なコメントをありがとうございました。今後の取組に反映していきたいと思います。

○鈴木委員 今、白坂先生がおっしゃったことはその通りだと思っていて、今まで通りの広報というのは、どちらかというところ、宇宙に注目を集める、宇宙はこれだけのことをやっている、宇宙はすごい、ここを言うストーリーでしたし、宇宙は役に立っているというのも多分同じストーリーだったと思うのですが、先ほどの議論の続きで言いますと、要するに、最終的にはこの宇宙は全部社会的なコンテキストの中にあるのだと。つまり、宇宙というのは我々の生活の中であって、かつ、今、特に経済安全保障ですとか国と国との関係が技術力の競争ないしは技術力のあるなしに関わってくる。そういう国力。最初、内閣府の説明では「国力」という言葉がありましたけれども、まさに国際社会における日本ということ考えた上で、やはり宇宙というのは不可欠であるとか、こうした宇宙に注目を集めるのではなくて、宇宙がもっと広いコンテキストの中でどういう役割を果たしているのかということの説明をいかなないと、宇宙はすごいとか、宇宙がこれだけ頑張っているとか、JAXAはこんな活動をしているという広報、要するに知ってもらうだけになってしまって、理解を深めるにはならないだろうと思うのです。

ですので、どのような形でそれを展開すべきというのは、まだまだこれから考える余地はあると思いますけれども、宇宙単体で説明できてしまうような、ロケットがこんなふうには飛んでいますとか、そのようなことももちろんやり続けていいと思うのですけれども、今求められているのはそれではないのではないかとということだと理解しています。

○片岡委員 宣伝、広報は大切だと思うのです。1つ御参考ですが、航空自衛隊は2027年までに航空宇宙自衛隊になる。これはすごいインパクトなのですね。恐らく、これから募集とかああいうものにもすごくドラスティックに効いてくる。将来は、静止軌道から、さらに月、シスルナまで行く。航空自衛官が宇宙飛行士として宇宙でも活動するというのは相当なインパクトで、こういうインパクトが結構あるもの、ちょっと毛色を変えた宣伝みたいなものがあるかなと。参考までに発言させていただきました。

(3) その他

宇宙事務局、文部科学省より日米首脳会談の結果と与圧ローバによる月面探査の実施取決めについて、報告を行った。

○後藤委員長 それでは、本日の委員会は以上で閉会といたします。

以上